

知恵と悟りはどこに見出されるのか？

「ヨブ記」からの説教 No.5
【聖書箇所】 28章1～28節



主要聖句: 28章12節

「・・・知恵はどこから見つけだされるのか。悟りのある所はどこか。」

ベレーシート

●4章から始まったヨブとその三人たちとの対論が終わり、ヨブの独白が27章～31章まで続きますが、その中の28章に「知恵の賛歌」という異色な部分が挿入されています。この章には「知恵」と「悟り」がワンセットになって、12節、20節、28節に3回登場しています。

(1) 12節「しかし、知恵はどこから見つけだされるのか。悟りのある所はどこか。」

(2) 20節「では、知恵はどこから来るのか。悟りのある所はどこか。」

(3) 28節「こうして神は人に仰せられた。「見よ。主を恐れること、これが知恵である。悪から離れることは悟りである。」」

●三人の友人たちはヨブを慰めるために、苦難に対する知恵をそれぞれ語って来ましたが、それらはヨブを慰めることはできませんでした。彼らはヨブの遭遇している苦しみがヨブの罪から来ていることをなんとか受けとめさせようとします。しかしヨブは自分の潔白をどこまでも主張します。そして最後までかみ合わないまま、ヨブの独白がきているのです。その中に今回の「知恵の賛歌」があります。実際、28章では知恵の価値の尊さを認めてはいますが、それがどこにあるかを問いかけています。この「問いかけ」が重要なのです。

●旧約にある箴言とか、伝道者の書とか、そしてヨブ記などの知恵文学と言われるものは、預言書のように上から(神から)直接語られるだけでは、人間はどうしても納得できないのです。下から、つまり、神に対する論争、問いかけ、これが出て来なければ神との交わりは本物とはならないのです。イスラエルの歴史において、こうした下からの問いかけ、人間から神への問いかけが一つの運動となって知恵文学が出て来たと言われます。人間は学ぶ耳、見る目と共に、「なぜ」「どうして」「いつまで」といった問いかける口を持っているのです。そうした問いかけは人間の中に必然的に持っている問いなのです。この問いかけがあるところに、信仰が本物になっていくのだと思います。

●「義人であるにもかかわらず、なにゆえ、苦しむのか」、その真剣なその問いかけが、今回のヨブのことばの中に見出されるのです。そこには、ヨブの友人たちがというような知恵ではなくて、神から来る知恵と悟りを得たいというヨブの願いが込められているのです。

1. 地下深くにある貴重な鉱物を得るとえ

●28章に記されている内容を簡単に記すと以下のようになります。

「人は貴金属を得るためには、どんな危険をも冒し、縦穴を掘って、その中にはいることもする。人間だけがそのことを知って、山を崩し、岩に坑道を作り、宝石を発見する。しかし、本当の知恵、悟りはどこにあるのか。人はこの世でそれを見出すことができない。知恵はどんな物にも勝るものだ。それは実に得がたい宝物である。それでは、ほんとうの知恵、悟りはどこにあるのか。神はそれをご存じであり、それがどこにあるのかを知っておられる。神はほんとうの知恵の源である。こうして神は人に仰せられた。『主を知ることは知恵であり、罪から離れることは悟りである。』と。」

●貴金属を得るために、人はどんな危険をも冒し、地下に縦穴を掘って、その暗やみの中に入って行きます。人間だけがそこに貴重な鉱物があることを知って、山を崩し、堅い岩に坑道を作ってそれを発見できるのです。神の知恵と悟りを得ることが、鉱物(金や銀、鉄や銅、そして宝石の類)を得るために地中深く穴を掘っていくことにたとえられています。単に掘り出すだけでなく、掘り出されたものを純化するために精錬するのです。これは人間にだけ与えられているすばらしい探求心と勇気です。ヨブは自分にふりかかっている苦難の現実に対して、真の答えを得たいと願ったのです。

2. 「知恵」と「悟り」という語彙

●旧約聖書には「知恵」に関する語彙の主なものは以下の四つがあります。「ホフマー」(הַחֲמָה)、**「ビーナー」**(בִּינָה)、**「ダアット」**(דַּעַת)、**「セーフェル」**(שָׁפֵל)。ヨブ記 28 章ではこの四つの中の最初の二つが使われています。



(1) 「ホフマー」(הַחֲמָה)

●「知恵」と訳される「ホフマー」とは、「創造の神秘、あるいは生態系のような被造物の神秘」であるとか、「神と人とのいのちのかかわりを創造する秘密」についての情報が保管されている巨大なフォルダと言えます。「フォルダ」というのは、さまざまな情報を分類、整理するための総合的な保管場所という意味です。フォルダの中にさらに関連する複数のファイルをまとめたフォルダが数えきれないほどあって、それがいくつもの階層になっているという保管システムです。

●たとえば、主の祈りの中に、「御名があがめられますように」という祈りがあります。「御名-Your Name」(「シムハー」שִׁמְחָה)も、実は、神ご自身が神の選ばれたイスラエルの民とのかかわりの中で啓示されたすべてが含まれる巨大なフォルダです。ですから、「主の御名を賛美します」と簡単に言うことはできますが、その内容たるや、膨大な神のみこころと力との現われとしての多くの神の名前が、「御名」という一つの言葉(フォルダ)の中に括られているのです。

●「御名」の中には、モーセがエジプトに遣わされる前に啓示された御名があります。「エフイェー・アシエル・エフイェー」でした(出エジプト 3:14)。それは「わたしはある。」という者」という意味です。他にも、「唯一

の御名」「万物の創造主」「聖なる御名」「全知全能の御名」「いつくしみの御名」「愛と恵みの御名」「栄光の御名」「いのちと光の御名」「義と公正の御名」「すべてに勝る偉大な御名」・・・など、神のご性質とみわざを表す多くの名前があります。それらの「御名」の中に隠されている宝を掘り出すこと(つまり、経験すること)が私たちに求められているのです。「知恵」もそうした意味合いにおいて捉える必要があります。なぜなら、「知恵」という巨大なフォルダの中には、掘り出されなければならない神と人と生きたかかわりを築いていく秘密が隠されているからです。

●「知恵」(神の知恵)という語彙は、「御名」と同じく、「神と人とのいのちのかかわりを創造する」ために必要な情報が保管されている巨大なフォルダのようなものなのです。

(2) 「悟り」(הִנְיָה)

●「悟り」と訳されている「ビーナー」(הִנְיָה)は、仏教的な意味の「悟り」という意味ではありません。

28章28節に「罪から離れることは悟りである」と記されているように、何が神のみこころにおいて正しいことか、それとも悪いことかを賢明に判断することを意味します。

●「ビーナー」(הִנְיָה)の動詞は「ビーン」(יָנַי)で「識別する、認識する」という意味ですが、その語彙と関連する「ベーン」(יָנַי)は「～と～の間」を意味します。つまり「ビーナー」(הִנְיָה)は、両極を意識しながら、その両極の間にあるものの中から、神に喜ばれることとそうでないものとをより分ける識別力、ないしは、神の時とそうでない時を分別する賢明な判断力を意味しています。ヨハネの福音書に見られるフレーズ、つまり、イエシュアが「女の方。わたしの時はまだ来ていません」(ヨハネ2:4)とか、「人の子が栄光を受けるその時が来ました。」(ヨハネ12:23)とか、「父よ。時が来ました。」(ヨハネ17:1)といったフレーズはそのことを意味しています。人間的な意味での、世間のいう意味での善悪、時のタイミングではありません。あくまでも神の目から見た善悪や時のタイミングを分別する力であり、分別するだけでなく、その力を発揮して、罪だと判断した時にはそれから離れること、時が来たと確信が来たときには勇敢に行動するといった意味合いを含んでいる。これが聖書のいう「悟り」です。「知恵」が神のみこころの巨大な情報源だとすれば、「悟り」はその情報源をもとに神のみこころを選び分け、選び取り、それを行わせていく力です。ですから、「知恵」と「悟り」がワンセットになっているのです。

3. 本当の知恵と悟りはどこにあるのか

●ヨブは本当の知恵と悟りはどこにあるのかと問いかけます。なぜなら、人はこの世で貴重な宝を見出すことができないからです。そして、その問いに対してヨブは「神はそれをご存知であり、どこにあるかを知っておられる」と答えを出しています。しかも、神こそ真の知恵の源であるという結論に行き着きます。そしてその神が次のように語っているのです。こうして、神は人に仰せられた。「見よ。主を恐れること、これが知恵である。悪から離れることは悟りである。」(28章28節)と。

(1) ヨブと三人の友人たちの知恵の源の理解について

●ここで、ヨブのいう知恵の源泉について考える前に、三人の友人たちが知恵の源をどのように考えていたかを

見てみたいと思います。以下のチャートはそのことをまとめています。

人 物	知恵の源泉
<p style="text-align: center;">エリファズ</p>	<p>(1) 知恵は人生をよく観察することによって学ぶことができる。 (2) またそれは同時に、先人の知恵ある者たちが告げたものである。</p> <p>4:8 「私の見るところでは・・・」 5:3 「私は・・・するのを見た」 5:27 「さあ、私たちの調べ上げたことはこのとおりだ。これを聞き、あなた自身で悟れ。」 15:17, 18 「・・・私に聞け。私の見たところを述べよう。それは知恵のある者たちが告げたもの。」</p>
<p style="text-align: center;">ビルダデ</p>	<p>(1) 知恵は先人たちによってすでに告げられている。それを尋ねて、自分のものとすべきである。 (2) 先代の人々の伝統的な知恵は、応報思想に基づいた知恵である。</p> <p>8:8 「さあ、先代の人に尋ねよ。その先祖たちの探求したことを確かめよ。」 8:20 「神は潔白な人を退けず、悪を行なう者の手を取らない。」</p>
<p style="text-align: center;">ツォファル</p>	<p>(1) 悔い改めて神に手を上げて求めるなら、神は知恵の奥義を告げられる。 (2) 自分は「悟りの霊」で語っている。 (3) とはいえ、他の友人と同様に「応報思想」である。</p> <p>11:6 「神は知恵の奥義をあなたに告げ、すぐれた知性を倍にしてくださるものを。」 20:3 「私の侮辱となる訓戒を聞いて、私の悟りの霊が私に答えさせる。」 20:4 「悪者の喜びは短く、神を敬わない者の楽しみはつかのまだ。」</p>
<p style="text-align: center;">ヨブ</p>	<p>(1) 神こそ真の知恵の源泉である。 (2) 人は自らの力でこの知恵を得ることは出来ない。 (3) 主を恐れることが知恵である。</p> <p>28:12 「知恵はどこから見つけ出されるのか。悟りのあるところはどこか。」 28:13 「人はその評価ができない。それは生ける者の地では見つけられない。」 28:28 「神は人に仰せられた。『見よ。主を恐れること、これが知恵である。悪から離れることは悟りである。』</p>

●ヨブの言う「主を恐れること」とは、新約的に表現するなら「主を信じること」と同義です。あっけない定義ですが、これがすべてであり、これが「知恵」だと神が語っています。また「悪から離れる」ためには、神にとって何が良いことであり、何が悪いことなのかを識別できなければなりません。これが「悟り」だと神が語っているのです。人間的な計りで、あるいは人間的な標準で、人間的な概念で、善と悪を判別できますが、それは神から来る「悟り」ではありません。使徒パウロはキリストに出会ってから、こう述べています。

「・・・私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。」(【新改訳改訂第3版】Ⅱコリント5章16節)

●常に、神の視点から、神の概念によって、神を知ることを決心したのです。この決心がないと、私たちは知らずに、自分がこれまで得た経験の中から、エリファズのように、またビルダデやツォファルのように、伝統的な教義や自分の独断的判断で、無意識のうちに、神のみこころを知ろうとします。パウロの上記の決心は重要です。常に、神に尋ね求め、神に問いかけていく姿勢が求められます。これまでそのように教えられてきたけれども、果たしてそのとおりかどうかと、「毎日聖書を調べた」ベレヤの教会のようではなければなりません。

●この意欲が今日の教会に欠けているのです。そうした構えがないと、私たちは目に見えるところで判断し、人間的な標準で判断して、真理を追い求めることをしなくなるのです。これは必ず「みことばの飢饉」に陥ります。聖書を読まないクリスチャンは、惰性で信仰生活を送るだけになります。それは、熱くもなく冷たくもないラオデキヤの教会のようです。その教会に「アーメンである方」がこう言われたことに耳を開かなければなりません。

「あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。」と(黙示録3:17)。

4. 神の知恵としてのキリスト

●「キリストは私たちにとって神の知恵」だと表現したのは使徒パウロです(Ⅰコリント1:21、1:30)。しかもこのことばは問題の多かったコリントの教会に対して宛てられた手紙の中にするされています。この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるとも述べています。キリストの十字架の死と復活の事実が多くの人にとってはつまずきとなっていますが、その事実が、信じる私たちにとっては神の知恵です。

①「義」— 行いではなく、キリストを信じる信仰によって義とされる、神に受け入れられること。

②「聖め」— キリストにあつて罪ある者がきよめられて、神の所有の者となれること。

③「贖い」— 身代りとして死なれ、復活によって私たちを永遠のいのちを保証されたこと。

④「神の召命と賜物は変わらない」— 神の選びの民イスラエルに対する神の愛は永遠に変わらないという鍵をもって聖書を読むならば、神のご計画がより開かれていきます。また、イスラエルの建国によって回復されたヘブル語に隠された神の概念をもってみことばを読むこと— これらはみな、「神の知恵」なのです。

●ヨブが求めても得られなかった神の知恵(創造の神秘、神と人とのかわりの神秘)と「悟り(知識)」とが、今や、キリストを通して私たちと与えられています。ただし、それは神を信じて、神に尋ね求める者たちに与えられるということを心に留めたいと思えます。

2014. 6.29